

1. はじめに

野田 (1984)、丹羽 (1988a, b) は、文中に「は」が含まれるかどうかによって文を有題文と無題文とに区別する。また、三上 (1970) では、「は」の勢力はピリオドを越えようとするとして述べられ、それは例 (1) における「走りつつ、チラリと自分の右手を見た」のような、文中に「は」が含まれていなくても、先行する文から題目（「 」でマークした語句）の「上条は」が受け継がれる、すなわち題目が省略された文のことである。このような文も野田 (1984) が有題文としている。

(1) 上条はカップル達を引き裂くように夜の街を突っ走る。

走りつつ、チラリと自分の右手を見た。(鎌池和馬『とある魔術の禁書目録』)

例 (1) の「走りつつ、チラリと自分の右手を見た」には主語がなく、省略された題目はそれにあたる。

例 (1) と異なり、例 (2) における「日本語がうまい」は命題が「主・述」からなるものである。その主体を示す題目は、先行する文の「ビクトルさんは」にあたり、つまり省略されていることが見て取れる。このような文も有題文である。

(2) ビクトルさんは春に来日し、すでに面識がある。日本語がうまい。

(星新一『きまぐれ体験紀行』)

例 (2) の「日本語がうまい」は「主・述」からなる命題で、その「主・述」に対し、さらに主体が要求され意味的には不完全である。このような命題は、主体を指す主語が欠ける命題なのであり、本稿では、このような命題を「不完全命題」と呼ぶこととする。

並列表現には例 (3) のような無題文と例 (4) のような、下線部（「背が低く、顔が大きい」）の題目が先行する文にある有題文がある。

(3) 田の中の小道が、ゆるくのぼって行くにつれ、大治郎の家が姿をあらわす。

正面に道場。その右手に 住居の勝手口が見え、石井戸が見える。

(池波正太郎『剣客商売』)

(4) 「おっ、噂をすれば」中尾が入り口のほうを見た。小坂が近づいてくるところだった。

「やってるな、誰が勝ってる？」得点表を見ながら小坂は訊く。
背が低く、顔が大きい。頭が身体にうずもれたように見えるほど首が短い。(東野圭吾『秘密』)

この二例の下線部は共に複数の「主・述」の命題による並列表現である。

本稿は、このような複数の「主・述」命題を統括する成分に焦点を当て、並列表現を記述し分析していく。

2. 先行研究

2.1 並列表現について

日本語の並列表現に関する研究は、これまでに連用形、テ、シなどの接続形式に関する個別的な研究が多く発表されており、寺村(1985)、中俣(2007)、謝(2009)のような複数の接続形式を扱う論考もある。

その中の寺村(1984:343)では、例(5)を挙げ、シの前件と後件を統括するのは「彼ハ音楽的才能ニ恵マレテイル」という「統括命題」であると述べている。

(5) 彼ハ、ピアノモギターモ琴モヒケルシ、フルートヤトランペットモ吹ケルシ、歌モ得意ダシ、作曲、編曲モデキル。

謝(2007)では、シによる並列表現を含めて接続形式の前件と後件が同じ心的枠に属すと述べられている。心的枠は発話の場で発話の意図に沿った話者の心的作用による範囲限定であり(p. 68)、接続形式を介する前件と後件がなす並列関係とは、話者にとって同じ心的枠に属し、論理的・時間的な結びつきがない、複数の事態あるいは特徴(=同じ主体が有する複数の特徴)が言語化されている関係である(p. 70)としている。さらに、評価性を例に、連用形、テ形、シの前件と後件が同じプラス評価、またはマイナス評価を帯びる例を挙げ、これらの形式による並列の前件と後件は等質性を持つと述べている。例(6)はプラス評価、例(7)はマイナス評価による等質性の例である。

(6) 藤田夫妻の部屋は三DK。「前より広いし、明るいし、きれい」と気に入った様子だ。(謝(2007)より)

(7) 目鼻立ちのりりしい、スラリとした少年だったので、ひそかに思いを寄せていたのだ。それなのにその仕打ち。二重に傷ついて恨みは深くなった。悲しくて悔しくて憎くて狂わしかった。(謝(2007)より)

2.2 現象描写文と無題文について

現象描写文の前身である現象文について、三尾(1948:48)は、「現象文は現象をありのまま、そのままをうつしたものである。判断の加工をほどこさないで、感官を通じて心にうつったままを、そのまま表現した文である。」と述べている。

仁田(1991)は、三尾(1948)の「現象文は述部が動詞である」をふまえて、動詞述語文のほか、形容詞述語文と名詞述語文の例を挙げ、現象文より幅広い現象描写文を位置づけた。現象描写文についてこう述べている。

〈現象描写文〉とは、〈述べ立て〉の一タイプであり、ある時空の

元に生起、存在する現象をそのまま主観の加工を加えないで言語表現化して述べ伝えたものである。主観の加工・判断作用を加えていないことから、言表事態たる現象に対する確認といったものは存するにしても、言表事態に対する推し量りの確からしさや推し量りの様態を表した〈判断のモダリティ〉は、現象描写文には存在しない。したがって、現象描写文は、無題文である。(p. 122)

話し手の視覚や聴覚等を通して捉えられた現在話し手の身の回りに存在する世界を、そのまま言語表現化して、述べ伝えた文である。このタイプが現象描写文の典型であり代表である。(p. 125)

謝(2009)は現象描写文における並列表現を考察した。このような考察は管見の限り見当たらない。

(8) 二人はまず、銀行へ行った。

… (略) …

それから、二人は外へ出た。表通りから離れる方向に向って歩いて行くと、静かな露路に面して、寺があり、墓が並んでいた。

(謝(2009)より)

(9) 僕は一人きりで、何処とも知れぬ山の中を歩いていた。廻りじゅうに暖かな、董色をした光が充ち満ちていた。草の葉っぱが金色に光って、遠くの方に海が見えた。(謝(2009)より)

例(8)、(9)では、前件と後件は同じく、評価性を帯びず、話者が限定された時間・空間で感官を通じて心に映ったままを、言語化したものであり、等質性はそこから生じている。この二例のような、最もモダリティ性の低い現象描写文における並列は、連用形、テでしか表せず、またその前件と後件は同じ場にある事態を表す。従って、連用形、テによる並列は、シ、バ、ガ、ケドによる並列より、命題の指向性が強いと考えられる。(同p. 93)

謝(2009:93)では、「現象描写文は、話者の心的態度が最も介入し難い文のタイプなのである。」とも述べている。

本稿は、謝(2007)で述べられた心的枠をベースに、謝(2009)の触れていない、前件と後件を統括する成分の観点から、並列表現における無題文と有題文の連続性を考察することを試みるものである。

3. 無題文における並列表現

3.1 文中に前件と後件を統括する成分がある場合

3.1.1 統括成分が空間を表す場合

例 (10) ~ (14) は、前件と後件が同じ文中成分に統括される例である。

「 」でマークした語句は、前件と後件を統括する成分である。

(10) 今、視線の先にあるなだらかな丘陵をひとつ越えたところに、ちいさな泉があり放牧地がある。(井上祐美子『五王戦国志 6 風旗篇』)

(11) 「いいの？」吟子がかよに尋ねたがかよは何も答えず吟子だけを見詰めていた。かよの後ろに 友子がおり、保坪がいて嫁のやいがいた。(渡辺淳一『花埋み』)

(12) 田の中の小道が、ゆるくのぼって行くにつれ、大治郎の家が姿をあらわす。

正面に道場。その右手に 住居の勝手口が見え、石井戸が見える。(池波正太郎『剣客商売』)

(13) 福岡市の街中で生まれ育った私は、小学校の六年間、夏休みの一カ月は浮羽郡の祖父母のところで過ごした。

…(略)…村芝居はちょうちん片手に祖母と出掛けた。道々、カエルの鳴き声が聞こえ、ホテルが舞っていた。(朝日新聞 1996. 8. 1)

(14) 諸所に 丘があり、川があり、奇岩怪石が横たわり、苔が一面に生えている。(国枝史郎『神州瀨瀨城』)

例 (10) ~ (14) では、前件と後件に共通の主語はないが、主語以外の共通の成分がある。例 (10) の「視線の先にあるなだらかな丘陵をひとつ越えたところに」、例 (11) の「かよの後ろに」、例 (12) の「その右手に」、例 (13) の「道々」、例 (14) の「諸所に」、は、前件と後件を統括しながら、その共通の空間(場所)を表す。これらの例における前件と後件は、文脈に限定された時間に文中の成分に明示された場所で話者の知覚で捉えた物、人の存在(例 (10) の「寺がある」、例 (11) の「保坪がいて」)、身の回りに存在する世界(例 (12) の「墓が並んでいた」、例 (13) の「ホテルが舞っていた」、例 (14) の「奇岩怪石が横たわる」と「苔が一面に生えている」)例 (14) の「丘がある」、を指すものもあれば、知覚を表す動詞述語の例(例 (12) の「石井戸が見える」、例 (13) の「カエルの鳴き声が聞こえる」)もある。これらの無題文は現象描写文でもあり、観察者の視点は、前件と後件における語句が指す二つの主体外部にある。

3.1.2 統括成分が時間を表す場合

前節の例 (10) ~ (14) の前件と後件を統括する成分が空間 (場所) を表すのに対し、次の例 (15) ~ (19) では、前件と後件を統括する成分は時間を表す。

- (15) ——いた！ いた！ 第三中隊の歩哨だ。
 斎藤大隊長は、地下たびの足を走らせて近寄った。黒い影は急に立ち上った。斎藤大隊長より背が高かった。
 「誰か！」
斎藤大隊長が叫んだ時、強烈な火光がひらめき、強い発射音をした。 (高木俊朗『インパール』)
- (16) 海上で正月を迎え、一月三日、鷗が船尾に舞い、富士の山頂が白く見えた。 捕虜たちは、めいめいに複雑な思いで、それを眺めていた。(豊田穰『海兵四号生徒』)
- (17) 私たちが連れてこられたのが金曜日、その日に五番目の部屋にいた人が殺されて流された。一晩あけて土曜日、六番目の部屋の人が殺されて、五番目の部屋に人が入れられた。 あなたが見た空っぽの部屋は、中にいた人が殺された後だったんだ。(乙一『ZOO』)
- (18) 六日、百一歳で亡くなった文弥さんは、この分野の人としてはめずらしく、しばしば政治を題材にした。
 … (略) …
訃報に接した日、米大統領選のテレビ討論があり、日本の六党首討論会があった。 政治の言葉がとびかった。文弥さんの哀切な語りとの落差に、ある感慨をおぼえた。(朝日新聞天声人語 1996. 10. 8)
- (19) あす十日、天皇、皇后両陛下は、ご成婚から四十年を迎えられる。一九五九年 (昭和三十四) のあの華やかなパレードから今日までに過ぎた歳月を思う。
 … (略) …
 パレードのオープン馬車から手を振るお二人。皇居から東宮御所への沿道には五十三万人の人々。テレビ中継を見た人は全国で千五百万人に達した。
テレビの受信契約が前年の倍増、といっても、まだ二百万台。この年、南極でカラフト犬タロー、ジローの生存が確認され、巨人・長嶋が天覧ホームランを打った。 (読売寸評 1999. 4. 9)

例 (15) ~ (19) における前件と後件を統括する成分は、例 (15) の「斎藤大隊長が叫んだ時」、例 (16) の「一月三日」、例 (17) の「土曜日」、例 (18) の「訃報に接した日」、例 (19) の「この年」などの時間を表す成分である。例 (15)、(16) は、文章の読み手をテキストに書かれたのと同じ

状況に立たせ、例(15)の前件と後件「強烈な火光がひらめき、強い発射音がした」、例(16)の前件と後件「鷗が船尾に舞い、富士の山頂が白く見えた」は、同じ時点で知覚で捉えた身の回りの世界を指す。例(17)～(19)は、例(15)、(16)と異なり、同じ時間で捉えられる身の回りの世界ではなく、外部の情報を得ることによって捉えたものである¹。

場所が限定された例(10)～(14)と異なり、例(15)～(19)では、時間が限定された前件と後件が成立する場所は、人の周り(例(15))、船から見えるところ(例(16))、建物の中(例(17))、地球上(例(18)、(19))などで、狭い範囲から広い範囲まで可能である。

例(20)は、テキストのはじめの文であり、先行する文脈がない例である。

(20) 防災訓練

日曜日の銀座に自衛隊の装甲車が走り、地下鉄で迷彩服の隊員たちが動いた。東京都の総合防災訓練に、度肝を抜かれた都民も少なくなかったらう。 (読売編集手帳2000.9.5)

例(20)では、「日曜日の」は、「銀座」を修飾しているが、前件における「自衛隊」と後件における「迷彩服の隊員」が語彙的に関連しているので、前件と後件の事柄が起こる時間が同じ「日曜日」であると考えられる。つまり、意味的には「日曜日」が前件と後件を統括し、例(15)～(19)と同じように時間を表す成分が前件と後件を統括しているのである。この例における前件と後件も、同じ時点で知覚で捉えられるものではない。

例(10)～(20)は、いずれも話者に限定された空間または時間における局面を聞き手に伝達するものである。それはつまり、前件と後件が同じ心的枠に属して等質性を有し、並列関係をなしているということである。観察者の視点は、統括成分が空間を表す例と同様に、前件と後件における語句が指す二つの主体外部にある。

3.2 文中に前件と後件を統括する成分がない場合

前節では、文中に前件と後件を統括する成分がある例を見た。本節では、文中に前件と後件を統括する成分がない例を記述し、分析していく。

例(21)～(24)における前件と後件は、知覚で捉えた身の回りの世界を指すものである。

(21) 何処かで琴の音がしている。豆腐屋では大鍋いっぱい油をはって油揚げを揚げている。荷車いっぱいにおからをバケツで積みこんでいる人夫がいる。酒屋の店さきの水道の水は出っぱなしで、小僧が一升徳利を洗っている。味噌樽がずらりと並び、味の素や福

¹ 仁田(1991)の述べた「過去の出来事を報道する現象描写文」に属する。

神漬や、牛鐘がずらりと並んで光っている。一口坂の停留場前の三好野では豆大福が山のような。 (林芙美子『放浪記』)

(22) ときどき周二は未明に起き、工場へ出勤するまえの一刻を、近くの立山墓地の散策に費やした。… (略) …。冬のそんな時刻には、墓地はまだにぶい薄明のなかに静まっている。霜柱が足元でころよい感触を残して崩れ、吐く息が白い。周二は生垣や鉄柵にしきられた墓石の間の小径を足のむくままに歩いた。(北杜夫『楡家の人びと』)

(23) 僕は一人きりで、何処とも知れぬ山の中を歩いていた。廻りじゅうに暖かな、葦色をした光が充ち満ちていた。草の葉っぱが金色に光って、遠くの方に海が見えた。(福永武彦『草の花』)

(24) 夕方、戸がふたたび開いた。番人が南瓜を幾つか、木の椀に入れて彼の前におくと黙ったまま小屋を出ていった。

… (略) …

戸がまた軋んで、さきほどの番人が姿をあらわした。

「パードレ、もう行かんならんぞ」

「どこ」

「舟着場じゃ」

立ちあがると、空腹のために、軽い眩暈を感じる。小屋の外は既に薄暗く窪地の樹々が、昼のむし暑さに疲れ果てたように、ぐったりとしている。蚊柱が顔をかすめ、遠くから蛙の声がきこえた。(遠藤周作『沈黙』)

例 (10) ~ (20) は、空間または時間を表しながら、前件と後件を統括する文中成分があるのに対し、例 (21) ~ (24) の前件と後件は、先行する文脈によって時・空間が限定されている。例えば、例 (21) は「酒屋」のあたり、例 (22) は「そんな時刻の冬の墓地」、例 (23) は「何処とも知れぬ山の中を歩いていた」時、例 (24) は「小屋の外」である。文中に統括する成分のない例 (21) ~ (24) の前件と後件は、例 (10) ~ (16) と同じように、同じ時点に知覚で捉えた身の回りの世界を指す。

例 (25) は、前件と後件がテキストのはじめで、先行する文脈のない例である。

(25) 「21世紀大予測」

がんの治療法が開発され、主要臓器の人工臓器が実現する。車は自動的に隊列走行する仕組みになり、火星で生命が存在した証拠も発見される。(読売編集手帳1999. 12. 26)

例 (25) の前件と後件は、テキストのタイトル「21世紀大予測」に統

括され、「21世紀」という時間に限定される。「がんの治療法が開発され、主要臓器の人工臓器が実現する」は、知覚で捉えた身の回りの世界を指すのではなく、話者が自身の知識で発生することが可能だと判断した事柄を指すのである。例(25)は未来の世界を描写したものであり、その前件と後件には仁田(1991)が挙げる現象描写文の用例に相当するものが見当たらないが、本稿はその性質を持つものであると考える。

例(10)～(25)は、前件と後件が共に話者自身の知覚、または得た情報で捉えた世界、あるいは発生することが可能だと判断した事柄を表し、それらは同じ枠(心的枠)に属する事象を指す。そこにおける前件と後件は等質性を持ち、並列関係をなしているのである。

次の例(26)～(29)は、それぞれ例(10)、(16)、(23)、(25)における接続形式の連用形またはテをシに書き換えた例である。

- (26) * 今、視線の先にあるなだらかな丘陵をひとつ越えたところに、ちいさな泉があるし放牧地がある。
- (27) * 海上で正月を迎え、一月三日、鷗が船尾に舞っていたし、富士の山頂が白く見えた。 捕虜たちは、めいめいに複雑な思いで、それを眺めていた。
- (28) * 僕は一人きりで、何処とも知れぬ山の中を歩いていた。廻りじゅうに暖かな、董色をした光が充ち満ちていた。草の葉っぱが金色に光っていたし、遠くの方に海が見えた。
- (29) * 「21世紀大予測」がんの治療法が開発されるし、主要臓器の人工臓器が実現する。

例(26)～(29)は、いずれも日本語として不自然な表現であるため、現象描写文に当たる無題文における並列表現は、連用形またはテでしか表わせないものである。

4. 有題文における並列表現

4.1 統括成分が先行する文にある場合

例(30)の下線部には題目がないが、先行する文脈には題目に当たる、場所を示す語句「食卓では」が存在するので有題文である。

- (30) 食卓では、父と高木が、真中に向き合った。高木の右に梅子が坐って、父の左に令嬢が席を占めた。 (夏目漱石『それから』)

前件と後件は、「食卓では」に統括されながら、現象描写文の性質を持つと考えられる。前件と後件はそれぞれ空間を表す「高木の右に」と「父の左に」を有し、さらに前件と後件を統括する「食卓では」が全体を包む空間を表す。このような例では、前件と後件を統括する成分は題目の形で文脈の中

に現れ、題目のない現象描写文から題目が先行する文に移行する。観察者の視点は、前件と後件における二つの主体外部にある。

例(31)～(33)では、前件と後件は「主・述」の命題である。これらの例の下線部は特徴を指し、その特徴の主体を指す題目は、先行する文にある。

(31) 「やってるな、誰が勝ってる？」得点表を見ながら小坂は訊く。
背が低く、顔が大きい。頭が身体にうずもれたように見えるほど首が短い。 (東野圭吾『秘密』)

(32) 私はゆっくりと煙を吸いこみ、ゆっくりと吐きだした。両手の指先が軽くしびれ、頭がぼんやりとした。 (村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)

(33) 行助はこうして夢のなかをさまよっているうちに目がさめた。のどが渇き、背中が痛かった。軀が熱かった。 (立原正秋『冬の旅』)

例(31)～(33)のすべての前件と後件は、知覚で捉えた身体の一部の特徴(例(31)の「背が低く、顔が大きい」、例(32)の「両手の指先が軽くしびれ、頭がぼんやりとした」、例(33)の「のどが渇き、背中が痛かった」)を指す。その主体を指す題目は、先行する文にあり、例えば、例(31)の「小坂は」、例(32)の「私は」、例(33)の「行助は」である。これらの題目はピリオドを越え、下線部の前件と後件を統括している。例(31)～(33)の下線部は知覚で捉えた身体の一部の特徴ということから、現象描写文の性質に近いものであるが、それらの「不完全命題」である前件と後件を統括する題目は、先行する文にあるので、有題文であり現象描写文ではない。本稿はこのような表現を現象描写文的な表現と呼ぶ。例(31)では、前件と後件が主体の二つの外的特徴を指し、観察者の視点は主体外部にあり、例(32)、(33)では、前件と後件が主体の二つの感覚を指し、観察者の視点は主体内部にある。つまり、この三例は観察者の視点が主体外部から主体内部へ移行することを示した例である。

例(34)～(38)では、前件と後件を統括するのが例(30)～(33)とは異なり、先行する文に「題目」という形で存在しない語句である。

(34) 登美子はやつれた顔をしていた。眼が濁って、唇が乾いていた。
そして口をあけて息をしていた。 (石川達三『青春の蹉跎』)

(35) 石田は翌日島村を口入屋へ遣って、下女を取り替えることを言い付けさせた。今度は十六ばかりの小柄で目のくりくりしたのが来た。気性もはきはきしているらしい。これが石田の気に入った。
…(略)…肌に琥珀色の沢があって、筋肉が締まっている。
石田は精悍な奴だと思った。 (森鷗外『鷄』)

(36) 新聞や雑誌を入れる木製の置物もある。彫物がしてあり、ニスが

塗ってある。彫物は薔薇で、たしかに薔薇の花には見えるが、彫刻的な格調は見えない。(立原正秋『冬の旅』)

(37) 彼等から少し離れたところに一人の若者が立っていた。白のポロシャツにジーンズという出で立ちだった。背が高く、顔が細い。
(東野圭吾『秘密』)

(38) 子どもの声が聞こえた。
…(略)…。中学生くらいの女の子。色が白くて、目が大きい。
(阿刀田高『空想列車(下)』)

例(34)の「眼が濁って、唇が乾いていた」を統括するのは「登美子のやつれた顔」、例(35)の「肌に琥珀色の沢があつて、筋肉が締まっている」を統括するのは「(下女の)春」だと想定でき、例(36)の「彫物がしてあり、ニス塗ってある」を統括するのは、先行文中にある「木製の置物」である。例(37)の「背が高く、顔が細い」を統括するのは「一人の若者」、例(38)の「色が白くて、目が大きい」を統括するのは「女の子」である。この四例の前件と後件の双方とも、知覚で捉えた人や物の特徴を指す「不完全命題」であり、現象描写文的な表現である。例(34)～(38)では、前件と後件が主体の外的特徴を指し、観察者の視点は主体外部にある。

例(30)～(38)では、前件と後件を統括する成分は文中になく、先行する文脈にある。これらの例の前件と後件が共に知覚で捉える特徴を指すことは、同じ心的枠に属すことの表れである。

次の例(39)～(41)は、それぞれ例(30)、(33)、(38)における接続形式の連用形またはテをシに書き換えた例である。

(39) * 食卓では、父と高木が、真中に向き合った。高木の右に梅子が坐ったし、父の左に令嬢が席を占めた。

(40) * 行助はこうして夢のなかをさまよっているうちに目がさめた。のどが渴いたし、背中が痛かった。軀が熱かった。

(41) * 子どもの声が聞こえた。
…(略)…。中学生くらいの女の子。色が白いし、目が大きい。

例(39)～(41)は、いずれも不自然な日本語表現である。つまり、例(39)～(41)のような現象描写文的な表現における並列表現は、現象描写文における並列表現と同じように連用形またはテでしか表わせない。

4.2 統括成分が文中にある場合

例(42)～(46)は、統括成分の題目が文中にある例である。しかし、例(42)、(43)の前件と後件は、今までの例とは異なり、知覚で捉えられる身の回りの世界を表すものではなく、主体の特徴を表すものである。したがっ

て、観察者の視点が存在しない。例(44)の前件と後件は、例(31)と同じ知覚で捉えた身体の特徴の一部である。例(45)、(46)では、前件と後件が共に身の回りの世界を表している。

(42) ゲリラには、ゲリラの信義があり、意地がある。(佐伯泰英『テロリストの夏』)

(43) 松山には、家庭があり、未来があった。(赤川次郎『素直な狂気』)

(44) ビキニ姿の被害者と肩を並べている男は、背が高く、髪が長かった。(西村京太郎『恐怖の金曜日』)

(45) そこには、数本の木があり、草花が咲いていた。(峰隆一郎『明治剣鬼伝』)

(46) その昔、ここには、道の引き込み線があり石炭を積み込むための小屋が建っていた。(山際淳司『ダブルボギークラブへようこそ』)

例(42)～(44)においては、「不完全命題」の前件と後件を統括する題目は主題を表すのに対し、例(45)、(46)の題目は場所を表している。

本節で取り上げた例のように、「主・述」からなる「不完全命題」を統括する題目は、人間、物体などの主体が多く観察される。前件と後件が「不完全命題」でない場合は、題目が場所を表すものもある。

5. おわりに

本稿で記述・分析した並列表現における前件と後件の統括成分をまとめると表1のようになる。無題文においては、観察者の視点が二つの主体外部にあるのに対し、有題文においては、観察者の視点が二つの主体外部だけでなく、主体外部や主体内部へと移行する例もある。また、有題文では観察者の視点の存在が考えられにくい、つまり現象描写文とは考えられない、主体の複数の特徴を表わす並列表現も見られる。

並列表現における前件と後件は同じ心的枠に属し、その表象として前件と後件は同じ観察者の視点で捉えられ、同じ成分に統括される。

「主・述」の命題である前件と後件による並列表現の中では、無題文は最もモダリティ性の低い現象描写文であり、連用形、テでしか表せない。その前件と後件は限定された時間・空間にある事態を表す。統括成分が文中になく、先行する文脈にある場合、現象描写文的な表現における前件と後件の接続は、連用形、テによるものがほとんどである。

本稿で取り上げた、前件と後件が「不完全命題」の例は、現象描写文の性質を持ち、「荘重な感じのする広いげんかんからなかへはいると、右側にひろい応接室があり、正面にすりきれたじゅうたんを敷いた階段がある。(横溝正史『怪盗X・Y・Z』)」のような、トによる条件表現の後件にくることも多い。複文レベルだけでなく、単文レベルでどう位置づけるかを、これか

らの課題とする。

表1 並列表現における前件と後件とその統括成分

	前件と後件を統括する成分	観察者の視点	前件と後件が不完全命題	セクション(例)
無題文	場所(文中)	二つの主体外部	×	3.1.1
	時間(文中)	二つの主体外部	×	3.1.2
	なし(文脈による限定)	二つの主体外部	×	(21)~(24)
	テキストのタイトル	二つの主体外部	×	(25)
有題文	場所(先行する題目)	二つの主体外部	×	(30)
	主体(先行する題目または題目に当たる成分)	主体外部(外見)	○	(31) (34)~(38)
		主体内部(感覚)	○	(32) (33)
	場所、主体(文中にある題目)	視覚で捉えられない主体の特徴	○	(42) (43)
		主体外部(外見)	○	(44)
		二つの主体外部	×	(45) (46)

参考文献

- 謝福台(2007)「複文における並列関係と意味的等質性—評価性をめぐって—」『日本語・日本文化研究』17, pp67-76、大阪外国語大学日本語講座。
- 謝福台(2009)「連用形・テ・シ・バ・ガ・ケドによる並列表現の体系—「等質性・異質性」と「取り立て助詞モ・ハとの共起」を軸に—」『日本語文法』9巻2号, pp. 88-104、くろしお出版。
- 寺村秀夫(1984)「並列的接続とその影の統括命題」『日本語学』3巻8号、明治書院(『寺村秀夫論文集I』(くろしお出版, 1992年) pp. 337-347

に再録)。

- 寺村秀夫 (1985) 「「対比」の構文と意味—日本語の場合—」『日本語と中国語の対照研究』10, pp. 1-22、日本語と中国語対照研究会。
- 中俣尚己 (2007) 「日本語並列節の体系—「ば」・「し」・「て」・連用形の場合—」『日本語文法』7巻1号, pp. 20-35、日本語文法学会。
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房。
- 丹羽哲也 (1988a) 「有題文と無題文、現象(描写)文、助詞「が」の問題(上)」『国語国文』57巻6号, pp. 41-58、京都大学文学部国語学国文学研究室。
- 丹羽哲也 (1988b) 「有題文と無題文、現象(描写)文、助詞「が」の問題(下)」『国語国文』57巻7号, pp. 29-49、京都大学文学部国語学国文学研究室。
- 野田尚史 (1984) 「有題文と無題文—新聞記事の冒頭文を例文として—」『国語学』136号, pp. 65-75、国語学会。
- 三尾砂 (1948) 『国語法文章論』三省堂、(『三尾砂著作集 I』pp. 3-133 に再録、2003年、ひつじ書房)。
- 三上章 (1953) 『現代語法序説—シンタクスの試み—』刀江書院 (復刊 くらしお出版 1972)。